

[インテルメッツォ — 間奏曲]

ある時、列車内でリンゴを食べている日本人を見て、ドイツから来た友人が突然言った。

「日本は戦争の後、すぐにアメリカ軍から救援物資をもらったせいかねえ」
ハア？ 何の話をし始めたのかと、頭が混乱した。そしてその次に続いた言葉にも。「日本人はピノキオの話を知らないの？」

“嘘をつくとも鼻が少しずつ伸びてしまう”ピノキオの童話は、もちろん日本でもよく知られているが、友人が話題にしたのはそのワンシーン。リンゴ（正確にはナシらしい！）の食べ方についてだった。

ドイツの人たちがリンゴを食べた後のカスを見たことがありますか？！
跡形もないか、ネズミのシッコみたいなものが残っているだけだ。皮はもちろんだけれど、芯も種も何も残っていない。オイシイ部分だけを食することに慣れている私たち日本人を見て、びっくりして、ドイツのように戦後の飢えの時代がなかったのかな、との意味だったのだ。
すっかり忘れていたが、「食べ物を大切に作る心」もピノキオの童話には込められているとか。

おなかですいたピノキオは、おじいさんからもらったナシ(!)を、最初はおいしいところだけ食べて、残りは捨てようとする。そんなピノキオにおじいさんは「大切なこと」を一つずつ教えていく。ピノキオはナシも見事にきちんと食べ切るようになる。

私の両親が初めてドイツを訪れた時、口にしたリンゴに「昔のリンゴの味がする！」と大感激していた。今は、ドイツのスーパーマーケットで売られているリンゴの中にも「FUJI」があるが、これは新種だから、両親の覚えていた昔の味ではないだろう。

そうそう、最近では柿も「KAKI」と表記されお店に出ているし、梨も「NASHI」と書いてある。それだけで日本への郷愁を感じる。店先に積んである箱に、「鳥取」という文字を目にした時、なつかしさにかられたことを思い出す。

そう言えば、イチゴは日本では「冬」の果物なのですか？！

小学校時代の友人がやっている果物屋さんの店先で、2月頭にたくさんのイチゴを見た。「アラ、早いね」といった私は、イチゴは1月にはすっかり“旬”だと笑われた。クリスマスのショートケーキを見てごらん、とも。
子供のころいちご狩りに行ったことがなかったのかもしれない。

私のイチゴのくっきりとした思い出は、1977年の4月か5月。緑の葉陰に隠れたイチゴを摘んだ、ベルリン郊外にあった下宿のオバサンの庭だ。リンゴの白い花も美しく咲いていた。初めての経験で楽しかったが、長い時間地面にしゃがみこんで摘んだので、腰や膝が結構痛くなった。日本のイチゴは、「温室人工栽培」が主だと知ったのは、そのずっとずっと後である。